

杜甫詩の真偽——「過洞庭湖」詩札記——

後 藤 秋 正

はじめに

『杜詩詳注』（中華書局、一九七九。以下、『詳注』）に収録される杜甫の詩は「逸詩」を除外すると、総計千四百五十七首を数える。『詳注』の目録では、このうち「送靈州李判官」（卷五）に、「宋朝奉大夫員安宇所収」という注記があり、以下、「東津送韋諷撰閩州錄事」（卷一一）から「逃難」（卷二三）までの二十五首に「員氏所収」という注記がある。これらはもともと『草堂詩箋』卷四十、「逸詩拾遺」に、「右二十七篇、朝奉大夫員安宇所収」として収録されていたものである。ただし『詳注』は『草堂詩箋』『逸詩拾遺』に収録される作品のうち、「虢国夫人」（卷二）、「収京」（卷一三）、「巴西聞収京（宮）闕送班司馬入京」（卷一三）、「送竇九歸成都」（卷二二）の四首には「員氏所収」とは記さない。また、「贈裴南部聞袁判官自来欲有按

問」と「題鄭原郭三十二明府茅屋壁」の二首は『草堂詩箋』とは題名を異にして収録する（『詳注』は傍線部を缺く）。これらの詩の出処は一見明らかかなようだが、員安宇という人物については不明な点が多い。周采泉『杜集書録』（上海古籍出版社、一九八六）の外編卷二、「選本律註類存目」には、『杜甫佚詩』という書名を挙げ、「宋員安宇輯、安宇、始末不詳。」としたうえで、以下のように述べる。

【編者按】草堂詩箋引員氏所輯佚詩二十七篇、所輯之詩、多与周紫芝相同、或即由周氏家所得。二十七篇中、五言古詩僅兩首、以五律為最多。

『杜集書録』の記述を僅かに補うものとして、宋・鄧名世撰『古今姓氏書弁證』卷九があり、「宋・陵州仁壽、員安宇、太子中允、弟安輿、屯田員外郎。」とあって、ここでは官名が異なる。また、宋・鄭樵撰『通志』卷二十八、

氏族略第四、楚人名の項には、「員氏、……員安宇、開封人。」とあって官名は記されない。この両書では陵州仁寿（四川省仁寿县）と開封（河南省開封市）と、貫籍が異なっているが、蔡毓榮・張徳地等纂修『四川通志』卷三十三、選舉上には「宋・員安宇、仁寿县人。」と見えるから、四川の人かもしれない。『杜集書録』は周紫芝の家蔵本にあったものと推測しているが、これも確証はない。

『杜集書録』は『杜甫佚詩』と題する書物を三種掲載するが、うち一本に「宋周紫芝輯録」として、「紫芝、字少隠、宣城人。紹興中登第、著有竹坡詩話。」といい、以下のように按語を付している。

【編者按】周紫芝自謂得杜甫佚詩二十八首、舟泛洞庭詩即其一。又聞惠二東溪特一送詩、陳叔易恬記云、「得於管城人家冊子葉中。」均見竹坡詩話。

周紫芝『竹坡詩話』（歷代詩話本）には、「近世士大夫家所藏杜少陵逸詩、本多不同。余所伝古律二十八首、其間一詩、陳叔易記云、得於管城人家冊子葉中。……（近世の士大夫の家に蔵する所の杜少陵の逸詩は、本より同じからざること多し。余の伝うる所の古律二十八首、其の間の一詩は、陳叔易記して云う、管城の人の家の冊子葉中より得と。）」と述べている。ここでいう「古律二十八首」と『草

堂詩箋』のいう「員氏所輯佚詩二十七篇」とがすべて重なるものなのかはわからない。結局のところ、『草堂詩箋』が増補した二十七首の作品が何に基づくのか、確かなことは不明なのである。なお『錢注杜詩』卷十八は、「右二十七篇。朝奉大夫員安宇所収。」として、「號国夫人」を除外した二十六篇を収め、金・王若虚撰『滹南遺老詩話（滹南遺老集）』（『錢注杜詩』引）を引いている。

世所伝十注杜詩、有日新添者四十余篇。吾舅周君徳卿嘗弁之云、惟瞿唐懷古・呀鵲行・送劉僕射・惜別行為杜無疑。其余皆非真本。蓋後人依放而作、欲窃盜以欺世者。其中一二雖稍平易、亦不免蹉跌。至于逃難・解憂・送崔都水・聞惠子過東溪・巴西觀漲及呈寶使君等、尤為無狀。

世に伝わる所の十注杜詩に、新たに添うる者四十余篇と曰うもの有り。吾が舅 周君徳卿嘗て之を弁じて云う、惟だ瞿唐懷古・呀鵲行・劉僕射を送る・惜別行のみ、杜為ること疑い無し。其の余は皆な真本に非ず。蓋し後人 依放して作り、窃かに盗みて以て世を欺かんと欲する者なり。其の中の一二は稍や平易なりと雖も、亦蹉跌を免れず。難を逃る・憂いを解く・崔都水を送る・惠子の東溪を過ぐるを聞く・巴西にて漲るを

観る及び寶使君に呈す等に至りては、尤も状無しと爲す。

また吳鷺山「杜詩的真偽」(『杜詩論叢』浙江文芸出版社、一九八三所収)も以下のように指摘している。

蘇東坡說李白・杜甫の詩集中皆有偽托的作品、而杜集比李集偽撰為少。……但是杜詩集是經過了後人的編輯增補而成的、篇什的混乱舛錯在所難免。而歷來注家的去取也時有異同。

前置きが長くなったが、このように早くから「新添」、「増補」などとして収録される詩の真偽には疑問が呈されており、杜詩の伝播・収録の経緯については多くの未解明の点が残っている。その中であつて周紫芝が得たという「過洞庭湖(洞庭湖を過ぎんとす)」(『詳注』巻二三)は出処が比較的是つきりとして見なされた作品である。以下、この詩の性格について考察してみたい。

一

五律「過洞庭湖」は次のように詠じられる。

蛟室困青草 蛟室 青草に困まれ
竜堆隱白沙 竜堆 白沙に隠る
護堤盤古木 堤を護りて古木盤りわたかま

迎權舞神鴉 權かを迎えて神鴉舞う

破浪南風正 浪を破りて南風正しく

回檣畏日斜 檣かざりを回して畏日斜めなり

湖光与天遠 湖光は天と遠く

直欲泛仙槎 直ちに仙槎を泛わたかべんと欲す

この詩について黄鶴『補注杜詩』巻三十六は杜甫の詩であることを前提として以下のように述べる。

詩云、「破浪南風正、回檣畏日斜」。既曰「回檣」、又曰「南風・畏日」、則非大曆四年春、自岳之潭經洞庭時作、当是大曆五年、自湖南歸襄陽時之作。

詩に云う、「浪を破りて南風正しく、檣を回して畏日斜めなり」と。既に「檣を回す」と曰い、又「南風・畏日」と曰えば、則ち大曆四年の春、岳より潭に之かんとして洞庭を経し時の作に非ず、当に是れ大曆五年、湖南より襄陽に帰らんとする時の作なるべし。

また『詳注』の題下注は以下のように指摘する。

潘子真『詩話』、元豊中、有人得此詩於洞庭湖中、不載名氏、以示山谷、山谷曰、「此子美作也」。今蜀本收入。

潘子真『詩話』に、元豊(一〇七八―一〇八五)中、人の此の詩を洞庭湖中に得たるもの有り、名氏を載せ

ず、以て山谷に示すに、山谷曰く、「此れ子美の作なり」と。今蜀本收入すと。¹⁾

潘子真是潘淳のこと。黄庭堅（一〇四五―一一〇五）に師事した。『潘子真詩話』があつたというが散佚、『苕溪漁隱叢話』前・後集に三〇条、『說郛』卷八一に四条など、諸書に引用されている。

この詩の制作時期について『詳注』は以下のようにいう。

大曆四年夏、公在潭州、此当是五年夏自衡州回棹、重過洞庭湖而作。今拠鄭叩編次為正。或疑公卒於耒陽、不応又作此詩、不知耒陽之卒、原未可憑、而此詩之精練、非公斷不能作。

大曆四年の夏、公は潭州に在り、此れ当に是れ五年の夏 衡州より棹を回し、重ねて洞庭湖を過ぎんとしして作るなるべし。今 鄭叩の編次²⁾に拠るを正しと為す。或るひと疑う公は耒陽に卒す、応に又此の詩を作るべからず、耒陽の卒を知らざれば、原より未だ憑る可からずと、而るに此の詩の精練なること、公に非ざれば断じて作ること能わず。

杜甫が耒陽で没したとすれば、衡州から棹を返して再び洞庭湖に入ることはあり得ないので、この詩は当然杜甫の作ではないことになるが、仇兆鰲はこの詩の練り上げられ

方は杜甫でなければ不可能だとして、杜甫の作と認めるのである。仇兆鰲は黄鶴と同じく、杜甫は耒陽から引き返して再び洞庭湖に浮かんだ辺りで没したという立場をとっており、「杜工部年譜」（『詳注』）の大曆五年の条には、「……秋、舟下荆楚、竟以寓卒、旅殯岳陽（……秋、舟もて荆楚に下らんとし、竟に寓するを以て卒し、岳陽に旅殯す）」と述べている。杜甫にはすでに大曆四年（七六九）の正月、岳陽から洞庭湖に浮かんで湘水に入り、潭州（湖南省長沙市）から衡州（湖南省衡陽市）へ向かった時の作とされる「過南岳入洞庭湖（南岳に過ぎらんとしして洞庭湖に入る）」（『詳注』卷二二）などの詩があるので、「過洞庭湖」の制作地と制作時期を先の通りに考えたのである。³⁾

また『九家集注杜詩』卷三十六はこの詩を「新添」として収録している。さらに『草堂詩箋』卷四十、「逸詩拾遺」の項もこの詩を載せ、末尾に「右一篇、見李希声・王直方詩話、云、得之於江心小石刻（右一篇、李希声・王直方詩話に見ゆ、云う、之を江心の小石刻に得と。）」と記す。李希声は李錡のこと、『李希声詩話』一卷があつたが散佚した。王直方は、字は立之、『帰叟（王直方）詩話』六卷があつたがこれも散佚した。⁴⁾ 李錡と王直方はいずれも江西詩派の一人に数えられる人物である。

『読杜心解』卷三之六もこの詩を杜甫の作と認め、以下のようにいう。

此詩得於洞庭石刻、不著姓名、論者疑信相半。然拋微之誌、旋〔旅〕殯岳陽之文、則五年夏秋間、當有向北入湖之事。

此の詩は洞庭の石刻に得たるも、姓名を著さず、論ずる者 疑信相い半ばす。然るに微之の誌の、岳陽に旅殯すの文に拋れば、則ち五年の夏秋の間、当に北に向かいて湖に入るの事有るべし。

岳陽に殯葬されたことが事実であるとしても、このことが杜甫が大暦五年の夏と秋の境に北に向かつて洞庭湖に入つたことの証拠になるかは疑問だが、『読杜心解』は真偽が半ばすることを認めながら、元稹「唐工部員外郎杜甫墓誌銘」（『元氏長慶集』卷五六）の記述を根拠として杜甫の詩と見なしたのである。

『杜應』卷十は、「畏日」は誤字ではないかと疑問を呈するものの、この詩を杜甫の「絶筆」と認め、以下のように述べる。

起語仍以青草湖・白沙駅作対。舟乘南風、又云、

「回櫓」、是湖南別親友而北上之作也。此詩當是公絶筆。

「畏日」似有誤字。

起語は仍ち青草湖・白沙駅を以て対と作す。舟は南風に乗れば、又云う、「櫓を回す」と、是れ湖南にて親友と別れて北上するときの作なり。此の詩は当に是れ公の絶筆たるべし。⁽⁵⁾「畏日」は誤字有るに似たり。

王嗣奭はこの詩の出処には触れずに、絶筆とみなすのである。そのほか例えば『錢注杜詩』卷十八は附録の「吳若本逸詩七篇」のうちに、「舟泛洞庭」と題してこの詩を収録し、「右洪玉甫云、有人得之江中石刻（右 洪玉甫云、人の之を江中の石刻に得たる有り）」⁽⁶⁾といい、さらに按語を付して、次のようにいう。

王直方云、此老杜過洞庭湖詩也。潘淳云、元豊中、有人得此詩刻于洞庭湖中、不載名氏、以示山谷、山谷曰、「子美作也」。今蜀本已收入。

王直方云う、此れ老杜の洞庭湖を過ぎんとする詩なりと。潘淳云う、元豊中、人の此の詩を洞庭湖中に刻するに得たる有り、名氏を載せず、以て山谷に示すに、山谷曰く、「子美の作なり」と。今 蜀本已に收入す。『杜詩鏡銓』卷二十に示される見解もほぼ同様であつて、「集外詩、見吳若本。洪玉甫云、有人得之江中石刻（集外詩、吳若本に見ゆ。洪玉甫云う、人の之を江中の石刻に得る有り）」とある。

ちなみに祝穆編・祝洙増補重訂『宋本方輿勝覽』（上海圖書館藏、宋咸淳（一二六五）—一二七四）刻本、上海古籍出版社影印、一九八四）卷二十九、岳州、洞庭湖の条には、「王直方云、老杜過洞庭詩曰、……。李希声云、得之江心小石上（王直方云う、老杜の洞庭を過ぎんとする詩に曰く、……。李希声云う、之を江心の小石の上に得たりと）」とある。このように「過洞庭湖」は杜甫の作と見なされて諸書に収録されている。⁷⁾

しかし杜甫の作とは認めない論者も存在する。早いものは明・胡震亨（一五六九—一六四五）の『唐音癸籤』卷十三であろう。『唐音癸籤』は李曰「月下独酌、四首」へ其二（『全唐詩』卷一八二）とこの詩を取り上げ、「敢乱真雜入、況他乎（敢て真を乱して雜入す、況んや他をや）」と述べて偽作であるとしている。朱鶴齡（一六〇六—一六八三）の『杜工部詩集輯注』卷十九は「杜工部集外詩」として収録し、題下注に「吳若舟泛洞庭（吳若は舟にて洞庭に泛かぶに作る）」といい、さらに、先の引用と重複する部分もあるが洪炎の説を引いて以下のように指摘する。

右一篇、洪玉甫云、有人得之江中石刻。『潘子真詩話』、元豐中、有人得此詩、刻于洞庭湖中、不載名氏、以示山谷、山谷曰、「此子美作。」今蜀本收入。按、此

詩有「収帆畏日斜」之句、斷非公作。畏日、夏日也。公過南岳入洞庭湖、在大曆四年正月、至五年夏、已卒于耒陽、安得復有洞庭之泛乎。或欲援此詩以証公之旅殯岳陽、尤為無拠。

右一篇、洪玉甫云う、人の之を江中の石刻に得たる有りと。『潘子真詩話』に、元豐中、人の此の詩の洞庭湖中に刻するを得たる有り、名氏を載せず、以て山谷に示すに、山谷曰く、「此れ子美の作なり」と。今蜀本收入す。按ずるに、此の詩に「帆を収めて畏日斜めなり」の句有り、断じて公の作に非ず。畏日は、夏日なり。公南岳に過ぎらんとし、洞庭湖に入るは、大曆四年正月に在り、五年夏に至つては、已に耒陽に卒す、安くんぞ復た洞庭の泛有るを得んや。或るひと此の詩を援きて以て公の岳陽に旅殯せらるるを証せんと欲す、尤も拠る無しと為す、と。

朱鶴齡は「畏日」の語に着目し、これが夏の強烈な日差しを意味する語であることから、大曆四年の正月に洞庭湖に入り、翌五年の夏に耒陽で没した杜甫がこの語を用いることはないので偽作だと見なすのである。

近年の研究者もこの詩の真偽を論じている。詳細に偽作説を展開しているのは、呉企明「杜甫詩弁疑札記」（『唐音

質疑録』上海古籍出版社、一九八六所載。以下、「弁疑」である。「弁疑」は冒頭に、薛雪『一瓢詩話』から、「好事者往往偽撰杜少陵逸詩、或謂得於石刻、或謂得於民間敗篋中、以冀流傳（好事者は往往にして杜少陵の逸詩を偽撰し、或いは石刻に得たりと謂い、或いは民間の敗篋中より得たりと謂い、以て流傳せんことを冀う。）」という一節を引いている。「弁疑」はこの引用の後に、「薛氏之説言之有理、杜甫集補遺詩『過洞庭湖』即是一例。」と、「過洞庭湖」も偽撰された一例であると指摘し、さらに南宋の慶元（一一九五～一二〇六）の間の進士である王象之の撰になる『輿地碑記目』卷三、「岳州碑記目」から「江心小石詩」の条を引き、「苕溪漁隱叢話」前集、卷十三、「唐音癸籤」卷十三なども引いて、もともと無名氏の作であったこの詩を杜甫の作としたのはすべて黄庭堅から始まったとして、以下のように述べる。

始以此詩為杜甫作的黄庭堅。潘子真記載説、……。王直方也説、……。按潘子真曾「師事山谷」⁽⁸⁾、王直方・李希声為同時人、從蘇・黄游。因此他們的説法、都出自黄庭堅。後人也就都以為「過洞庭湖」為杜甫作、如魯豈編・蔡夢弼箋「杜工部草堂詩箋」・王十朋「王狀元集百家注編年杜陵詩史」二書之「拾遺」欄、均錄此

詩、其源蓋出于黄庭堅。

「弁疑」が指摘するように、この詩が杜甫の詩と見なされた根拠はただ黄庭堅が認めたからに過ぎない。また、傅光「杜甫研究（卒葬卷）」（陝西人民出版社、一九九七）は黄庭堅の「独断的」な判断にも触れて、「過洞庭湖」不僅不是杜甫詩、更不是杜甫大曆五年詩。」と結論づけている。さらに丘良任「杜甫湖南詩作考弁」（『杜甫与長沙——論文集』中国文联出版社、二〇〇〇所載）も偽作と断定して次のようにいう。

仇兆鰲『杜詩詳注』和楊倫『杜詩鏡銓』是兩部杜詩編年体的名著。……前書錄杜甫湖南詩一百首、後書錄九十五首。兩人对湖南地理均不熟習、頗多錯乱。也有些夔州詩誤入湖南詩、也有湖南詩誤入夔州詩的、也還有偽詩誤入的。我們研究杜甫的湖南詩、不能不做一番清理工作。

「過洞庭湖」一首、兩書均收入。這首原是集外詩。『詳注』于題下注、「……」。這原是一首來歷不明的詩。詩有「破浪南風正、回櫓畏日斜」是夏日景象。少陵兩次經過洞庭、俱是嚴冬、完全不符、定是偽作。

丘良任の説は前段で『詳注』と『杜詩鏡銓』が湖南の地理に不案内なために「錯乱」のあることを指摘するほかは

朱鶴齡の指摘とほぼ重なる。

二

では「過洞庭湖」を語彙の面から検討してみよう。この点からの検討は従来ほとんどなされていないようである。

詩を再度引用する。上段に『詳注』所載の詩（前掲）を再掲し、下段に『詳注』の「一作」に基づく詩を掲出して、異同のある部分に傍線を付した。『詳注』の「一作」とは、例えば南宋の紹興十五年（一一四五）の成書である江少虞箋『事實類苑』卷六十一に、「往年有人於洞庭湖中得一石刻、一詩云、……。或持問諸作者、云此老杜詩也（往年人の洞庭湖中に於いて一石刻を得しもの有り、一詩に云う、……。或るひと持ちて諸を作者に問うに、云う此れ老杜の詩なりと。）とあつて引かれる詩と末句の「星槎」を「仙槎」に作るほかはすべて同じである。なお『宋本方輿勝覽』に見える異同には二重傍線を付した。

蛟室困青草

蛟室困青草

蛟室 青草に困まれ

竜堆隠白沙

竜堆擲白沙

竜堆 白沙を擲す

護堤盤古木

護江盤古木

迎櫂舞神鴉

江を護りて古木盤り
迎棹舞神鴉

破浪南風正

棹を迎えて神鴉舞う
破浪南風正〔止〕

回櫂畏日斜

帆を収めて〔帰舟〕畏日斜

湖光与天遠

雲山千万量

直欲泛仙槎

雲山 千万量
低〔底〕処上星槎

低き処〔底処〕より星槎に上らん

異同も考慮しながら起聯から見てもよい。「蛟室」は、大水を引き起こすというみずちの棲家。『詳注』は『洞庭記』の一文を引く。詩における用例としては孟浩然「永嘉上浦館、逢張八子容」（『全唐詩』卷一六〇）に、「廨宇隣蛟室、人煙接島夷（廨宇 蛟室に隣し、人煙 島夷に接す）」とあるのが早かろう。「水嬉」は舟遊び、水上のさまざまな遊戲。「青草」は、青草湖。岳陽の西南にあつて湘水と接し、北は洞庭湖に続いていた。杜甫に「宿青草湖」（『詳注』卷二二）があり、冒頭に「洞庭猶在目、青草続爲名（洞庭猶お目に在り、青草 続ぎて名を爲す）」という。

「竜堆」は、湘水の西岸に近い中洲の名。中洲の名としてこれを詠じたのは「過洞庭湖」が最初であろう。その後、元・梁曾（一二四二～一三二二）の「岳陽樓」（『元文類』卷六）に、「万里舟航通鳥道、四時雲雨護竜堆（万里舟航鳥道を通じ、四時雲雨竜堆を護る）」と詠じられるのは、この詩を意識したものかも知れない。梁曾の「登岳陽樓、二首」（『其二』）（『御選元詩』卷四四）は、「乾坤好句唐工部、廟廊雄文宋范公（乾坤の好句唐の工部、廟廊の雄文宋の范公）」と詠じているからである。「白沙」は、湘水に通ずる白沙湖に近い白沙駅。杜甫「宿白沙駅」（『詳注』卷二二）の頷聯に、「駅辺沙旧白、湖外草新青（駅辺沙は旧より白く、湖外草は新たに青し）」という。貫休（八三二～九二二）に「避寇白沙駅作」（『全唐詩』卷八三一）があるが、「過洞庭湖」との関連は見出せない。「護堤」は堤防を強化するために樹木を植えて根を張らせること。杜甫の他の詩に用例はなく、白居易「草堂前新開一池、養魚種荷、日有幽趣」（『全唐詩』卷四三〇）に、「繞水欲成徑、護堤方挿籬（水を繞りて徑を成さんと欲し、堤を護らんとして方に籬を挿む）」とある。「護江」だと、これも白居易「杭州春望」（『全唐詩』卷四四三）に、「望海樓明照曙霞、護江堤白蹋晴沙（海を望む樓明らかにして曙霞を

照らし、江を護る堤白くして晴沙を蹋む）」とある。「盤古木（蟠古木）」という描写は『全唐詩』ではここにしか見られない。『詳注』は、「君山多古木、少草（君山に古木多く、草少なし）」というのみであるが、張潛『讀書堂杜工部詩集註解』卷二十には、「又有金沙洲、在湖中、名竜堆、岸植古木、所以護堤使固（又金沙洲有り、湖中に在り、竜堆と名づく、岸に古木を植うるは、堤を護り固からしむる所以なり）」とあって、古木を植えるのは護岸のためであることを説明する。ここに見える金沙洲は先に見た竜堆のこと。金沙堆ともいった。「迎權」は、李嘉祐「送冷朝陽及第東歸江寧」（『全唐詩』卷二〇六）に、「稚子歡迎權、隣人為掃扉（稚子は歡迎て權を迎え、隣人は為に扉を掃かん）」とある。ただ鳥との組み合わせから見れば、王阮「竜塘久別、乘月再到、奉呈同社」（『義叢集』、『宋詩鈔』卷九三）に、「青山識面爭迎權、白鷺知心不避船（青山面を識り争いて權を迎え、白鷺心を知りて船を避けず）」とあるのと発想は近い。「舞神鴉」については、『詳注』も「杜甫全集校注」（人民文学出版社、二〇一五）卷二十も『岳陽風土記』から、「巴陵鴉甚多、土人謂之神鴉、無敢弋者（巴陵に鴉甚だ多し、土人之を神鴉と謂い、敢えて弋る者無し）」という一文を引く。『詳注』はさらに

『杜詩蘭』卷三十一の指摘を引用する。

唐張裕「送韋整尉長沙」詩、「風帆彭蠡疾、雲水洞庭寬、木客提蔬束、江鳥接飯丸。」可見神鳥接丸、非特宮亭湖也。熊孺登「董監廟」詩、「神鳥慣得商人食、飛趁征帆過蠡湖。」吳江周篆曰、「神鳥在岳州南三十里、群鳥飛舞舟上、或撒以碎肉、或撒以荳粒、食葷者接肉、食素者接荳、無不巧中。」……。

唐の張裕の「韋整の長沙に尉たるを送る」詩に、「風帆 彭蠡疾く、雲水 洞庭寬し、木客 蔬束を提げ、江鳥 飯丸に接す」と。神鳥の飯丸に接すること、特に宮亭湖のみに非ざるを見る可きなり。熊孺登の「董監廟」詩に、「神鳥 商人の食を得るに慣れ、飛びて征帆を趁おいて蠡湖を過ぐ」と。吳江の周篆曰く、神鳥は岳州の南三十里に在り、群鳥 飛びて舟上に舞い、或いは撒くに碎肉を以てし、或いは撒くに荳粒を以てするに、葷を食らう者は肉に接し、素を食らう者は荳に接し、巧みに中たあらざることを無し」と。……。

ここには張裕（張祐の誤り）の「送韋整尉長沙」（『全唐詩』卷五一〇）と、熊孺登の「董監廟」（『全唐詩』卷四七六）が引かれる。ただし張祐も熊孺登も中唐の人であって、これらの詩が「過洞庭湖」の典故になっているわけではな

い。飯丸は握り飯、宮亭湖は、彭蠡湖の別名。後に鄱陽湖を指すようになった。「破浪」は、船が波を押し分けて進む。杜詩には、「秋日夔府詠懷、奉寄鄭監李賓客一百韻」（『詳注』卷一九）に、「風期終破浪、水怪莫飛涎（風期には終に浪を破らん、水怪は涎を飛ばす莫かれ）」とあり、「北風」（『詳注』卷二二）にも、「滌除貪破浪、愁絕付摧枯（滌除すれば破浪を貪らんも、愁絶す摧枯に付するを）」とあるが、李白「行路難、三首」（其一）（『全唐詩』卷二五、卷一六二）に、「長風破浪会有時、直挂雲帆濟滄海（長風浪を破るに会かなず時有り、直ちに雲帆を掛けて滄海を濟らん）」とあり、同じく「贈宣城宇文太守、兼呈崔侍御」（『全唐詩』卷一七一）に、「無風難破浪、失計長江辺（風無くして浪を破ること難し、計を失う長江の辺）」とあるのが早いだろう。「南風」は諸書に見えるが、「南風正」、風が真南から吹きつける、の用例は少ない。その中にあって元・袁士元、字は彦章の七律「送沙字丁平章孫秉彝」（『元詩選初集』卷四八、『書林外集』）はどうか。

公孫年少尚輕肥 公孫は年少にして尚お輕肥
回首誰知世事非 首を回らして誰か知らん世事の非なるを

万里荒煙迷故道 万里 荒煙 故道に迷い

半江斜日照漁磯 半江 斜日 漁磯を照らす

帆開雨後南風正 帆は雨後の南風の正しきに開き

家指天辺北斗帰 家は天辺の北斗を指して帰る

我亦乗桴浮海去 我も亦桴に乗り海に浮かびて去かん

沙頭白鳥故飛飛 沙頭の白鳥故に飛飛たり

元朝の詩人たちは杜甫を尊崇しており、この詩も多分に「過洞庭湖」と通い合う部分がある。「過洞庭湖」が杜甫の作であると認められるようになった風潮と関連しよう。

「南風止」の用例は全く見られない。

「回檣」は、舟の向きを変える。これも用例は極めて少ない。元・丁復「扶桑行、送鉅仲剛東帰」(『元詩選二集』

卷一六。『檣亭集』)に、「夜半海水赤、南風無回檣(夜半

海水赤し、南風 檣を回すこと無かれ)」とあるのが早いものである。『収帆』ならば趙嘏「江上逢許逸人」(『全唐詩』卷五四九)に、「収帆依雁湓浦宿、帶雨別僧衡

岳迴(帆を収め雁に依りて湓浦に宿し、雨を帯び僧に別れて衡岳迴る)」とあるのが唐詩に見える唯一の例であろう。

「畏日」は、炎熱のひどい夏の太陽。『春秋左氏伝』文公七年の条に、「趙衰冬日之日也、趙盾夏日之日也(趙衰は冬日の日なり、趙盾は夏日の日なり)」とあり、杜預の注に、「冬日可愛、夏日可畏(冬日は愛す可し、夏日は畏る可

し)」というのを踏まえる。ただし「畏日」という形で用

いられることはまれであり、例えば杜甫「瞿唐兩崖」(『詳注』卷一八)の「義和冬馭近、愁畏日車翻(義和 冬馭近

し、愁えて畏る日車の翻らんことを)」の句のような形で表れる。尾聯はことに異同が多い。「湖光」の用例はしば

しば見られる。李白「陪從祖濟南太守、泛鵲山湖、三首」

(其二)(『全唐詩』卷一七九)には、「湖濶數千里、湖光搖碧山(湖濶きこと數千里、湖光 碧山を揺るがす)」とあ

る。「与天遠」は唐詩には見えない。時代は下るが、元・

黃玠「湖光山色樓」(『樵李詩繫』卷五)から引いておこう。

一川碧浪与天遠 一川の碧浪 天と遠く

滿地白雲如水流 滿地の白雲 水の如く流る

「泛仙槎」は、韋莊「夏口行、寄婺州諸弟」(『全唐詩』卷六九八)の末聯に、「誰道我隨張博望、悠悠空外泛仙槎

(誰か道う我 張博望に随い、悠悠として空外に仙槎を泛かぶと)」とあるのが早い。張博望は張騫のこと。「雲山」

の用例は多い。偽作説はあるが蔡琰「胡笳十八拍」(第二拍)(遼欽立「先秦漢魏晉南北朝詩」『漢詩』卷七)に、

「雲山万里兮歸路遐、疾風千里兮揚塵沙(雲山 万里 歸路遥かに、疾風 千里 塵沙を揚ぐ)」とあり、杜甫にも十例ほどがあつて、先に一部を引いた「北風」では、「隱

几看帆席、雲山湧坐隅（几に隠りて帆席を看れば、雲山坐隅に湧く）と見える。「雲山千万疊」の句は、南宋末、元初の人、陳允平の「錢塘旅舍」（『江湖小集』卷一七）に、「雲山千万疊、身事恨悠悠（雲山 千万疊、身事 恨み悠悠）」と、同じ句が見えている。「底処」は、どこ。何処と同じ。唐詩では韓愈「滝吏」（『全唐詩』卷三四一）に、「潮州底処所、有罪乃竄流（潮州は底の処所ぞ、罪有りて乃ち竄流せらる）」とあるが、宋代に入ると用例は増加する。例えば楊万里「山雲」（『誠齋集』卷一八）に、「春従底処領雲来、日日山頭絮作堆（春は底処より雲を領いて来る、日日 山頭 絮は堆と作る）」とある。「星槎」は銀河に上るいかだ。早くは庾肩吾「奉使江州、舟中七夕」（『先秦漢魏晉南北朝詩』「梁詩」卷二三）に、「漢使俱為客、星槎共逐流（漢使 俱に客と為り、星槎 共に流れを逐う）」とあり、唐詩にも数例が見えている。

このように見えてくると、詩語の面からは中唐以後の詩に求められる用例が多い。しかも、宋詩に至って頻出する語の多いことも理解されよう。

おわりに

先に見たように、詩語の面からも「過洞庭湖」を杜甫の

詩と断定することは困難である。すでに朱鶴齡などの指摘もあったが、丘良任「杜甫湘江詩月賦」（『杜甫在湖湘』湖南文芸出版社、二〇〇三所載）は「石刻」にも触れて、以下のように偽作と断定する。

査「湘陰図志」¹⁰載「唐杜甫過洞庭湖詩石刻」一文、言此詩竄改經過甚詳、并謂、「此詩末見甫集、後人展軋刻石、不能詳其年代、遂牽合以就文義爾。」此詩斷為偽作。

石刻の文字もはつきりせず、石刻自体がいつのものかも判然としなかったのである。それが結果として、尾聯に大幅な異同が生ずることにもつながったのである。先に引いた「弁疑」はさらに、「過洞庭湖」不当作杜甫詩、宜乎帰『全唐詩』「無名氏」欄内。」とも指摘している。「弁疑」は『全唐詩』の「無名氏」の卷（卷七八五、卷七八七）に収録すべきだというが、実のところこの詩は唐代詩人のものかどうかとも判然としないのである。ましてや「杜臆」のように杜甫の「絶筆」と見なすのは大いに問題がある。したがって杜甫の晩年の詩を考察するに際しては、湘江を下って再び洞庭湖に入った辺りで没したことを論証する資料として利用することはあつてはならず、検討の対象からは除外するのが妥当であろう。

注

- (1) 五代・闕名編『蜀本杜詩』二〇巻を指す。すでに散佚。周采泉『杜集書録』などを参照。
- (2) 鄭印(鄭印)には『杜少陵詩音義』があり、紹興辛亥(一一三一)に書かれた序が『補注杜詩』「伝序碑銘」、「詳注」巻二五に収められる。
- (3) 黒川洋一『杜甫の研究』(創文社、一九七七)、第四章、「杜甫の発見」、二『唐書』杜甫伝中の伝説について、杜甫の「洞庭病死説」と「耒陽飢死説」を詳細に検討し、「過洞庭湖」にも言及している。本論からは多くの恩恵を蒙った。
- (4) 諸書に引用されるが、宋・曾慥編『類説』巻五七には五一条が引かれる。
- (5) 例えば黄生(一六二二〜一六九六?)の『杜詩説』巻一二も、「此詩雖得之江心石刻、然系杜公手筆無疑(此の詩は之を江心の石刻に得と雖も、然るに杜公の手筆に系ること疑い無し)。」と云って「過洞庭湖」を杜甫の最後の詩と見なしている。
- (6) 玉甫(玉父)は洪炎の字。黄庭堅の外甥。元祐(一〇八六〜一〇九三)末年の進士。『西渡集』二巻、補遺一卷がある。
- (7) 辺連宝『杜律啓蒙』五言巻九に、「此詩得于洞庭石刻、不著姓名、山谷定為少陵作。其雄深老練、信非少陵不能也(此の詩は洞庭の石刻に得たり、姓名を著さず、山谷は定めて少陵の作と為す。其の雄深老練なること、信に少陵に非ざれば能

くせざるなり)。」という。また『唐宋詩醇』巻一八にも同様の指摘がある。

- (8) 『記纂淵海』巻二一に、「紀勝」を出典として、「潘淳師事山谷、自称谷口小隱(潘淳は山谷に師事し、自ら谷口の小隱と称す)。」という一文を載せる。

- (9) 周紫芝『竹坡詩話』(歴代詩話本)には先の引用に続けて、「又舟過洞庭一篇云、「蛟室困青草、竜堆擁白砂。護江蟠古木、迎棹舞神鴉。」……此決非他人可到、其為此老所作無疑(又舟 洞庭を過ぐ一篇に云う、「蛟室 青草に困まれ、竜堆 白砂を擁す。江を護りて古木蟠り、棹を迎えて神鴉舞う」と……。此れ決して他人の到る可きに非ず、其の此の老の作る所為ること疑い無し)。」とある。従つて、周紫芝も杜甫の作であると断定していることになる。

- (10) 『杜甫在湖湘』三八頁に、「光緒六年(一八八〇)刊」とある。

- (11) 『詳注』は最晩年の詩を「暮耒陽以僕阻水、書致酒肉、……」、「迴棹」、「過洞庭湖」、「登舟將適漢陽」、「暮秋將歸秦、留別湖南幕府親友」、「長沙送李十一」、「風疾舟中伏枕書懷、三十六韻、奉呈湖南親友」の順に配列しており、「過洞庭湖」の存在が耒陽死亡説を否定する論拠となつてゐることが知られる。

(北海道教育大学名誉教授)